

“心”のある援助が世界との信頼関係を築く



キャスター
草野 満代

学生時代から旅が好きで、これまで約30カ国を訪れたことがある草野満代さん。長年、報道番組のキャスターを務め、世界のさまざまな情報に触れる一方、ほんの数分間で伝えるニュースの裏側にある、開発途上国の“生きた”現場をじっくり見たという思いを募らせていた。

そんな彼女が2006年11月、中南米のポリビアとパナマを訪問、現地の人々の暮らしやJICAの協力の現場を視察した。日本のマスメディアでは、「援助」「ODA」というと、とかく巨大なダム・橋の建設や緊急人道援助などが注目されがちだが、JICAの人を通じた技術協力は、彼女の目にどのように映ったのだろうか。

(続きは裏ページへ)

「ささやかな一歩を忍耐強く 続ける協力が日本には必要」

キャスター

草野 満代

Kusano Mitsuyo

1967年岐阜県出身。津田塾大学学芸学部卒業後、89年日本放送協会(NHK)に入局。「NHKモーニングワイド」「NHKサンデースポーツ・サタデースポーツ」「紅白歌合戦」などのキャスター、司会として活躍。97年に退局し、フリーランスとして「筑紫哲也NEWS23」のキャスターを2006年9月まで務める。03～05年、JICAの前広報誌『国際協力』の中でインタビューとして国際協力を携わるさまざまな人にインタビュー。06年11月にJICAの派遣によりボリビア、パナマを訪問。



photos by Kamazawa Kyuya

国際協力にはいろんな形があって、円借款で大規模な橋や道路を建設するものがある一方、今回ボリビア、パナマで私が目にした協力はとても“ささやか”なものでした。いい意味で「ささやか」と言っていますが、例えばボリビアでは、村に手掘りの井戸を作って安全な水を使えるようにする協力を行っています。「たった井戸一つ」と思うかもしれませんが、何時間もかけて水くみに行っていたり、不衛生な水しか得られなかった人々にとっては生活を一変させる力を持つ井戸なんです。

また、パナマでは、ほとんど家から出たことがない先住民族の女性を支援する青年海外協力隊員に会いました。そこでは男性が外で稼いで女性は家を守るという考え方が強く、「家を守る」というと聞こえはいいけれど、実際は家に縛られ、孤立感を深めているのです。そこで隊員の眞貝沙羅しんがいさんの支援で、女性たちがグループをつくり、村に何が必要なのかなどを話し合ったりしています。

しかし夫の理解を得られなかったり、交通手段がなくて、出てこられない女性もたくさんいます。眞貝さんがいなくなったら続けられるのか、心配もあります。彼女も「この活動が女性たちに何をもたらすのか」自問する毎日だと言っていました。だけど信じてやるしかない。一進一退かもしれないけれど、ささやかな一歩を、忍耐強く続けていくことが大切なのだと思います。少なくとも、遠く離れた日本から来て自分たちのために力を注いでくれる若者が、村の女性たちの心の支えになってい

るように感じました。

ボリビアではJICAが支援してきた日系移住地を訪問しました。驚いたのは、沖縄からの移住者がつくった移住地で、子どもたちが三線さんしんで「涙そうそう」を演奏しウチナーグチで歌ってくれたこと。三線は1世の方が、歌は沖縄から派遣された先生が教えているようですが、移住から半世紀が過ぎ、スペイン語を話す2世、3世が増える中で、沖縄の言葉や文化を絶やさないよう努力する姿に感動しました。もちろん移住地を離れてボリビア人として生きていく日系人もいるでしょう。でも日本とのきずなを大切にしたいという人々の切実な思いを、私たちは忘れてはいけないと思います。

また、今後の支援のあり方としては、もっと公な議論をして検討し、彼らの自助努力では難しい部分を補いつつ、より自立を促していくことも重要です。

今回、現場を見て一番感じたのは、そこには“心”があるということ。過酷な環境の中で、現地の人々と一緒に何かをして、心を寄り添わせ、お金やモノを支援するだけでは決して生まれない信頼関係を築く。それが国際協力の核なのですね。こうしたささやかな積み重ねが日本にとって何より必要なことだと思います。今、自分さえよければいいと、世界にあまり目を向けられない人が多いように感じますが、食料やエネルギーの大部分を海外に依存している日本は、世界の国々と信頼関係を築いていかなければ生きていけません。最前線の現場は改めて私自身にそのことを教えてくれました。